

離島実習を通して感じたこと

今回私は奄美大島に行き、ファミリークリニックネリヤと県立大島病院で実習をさせてもらいました。ネリヤでは外来の見学をさせてもらったり訪問診療や訪問看護と一緒に連れて行ってもらったりしました。大島病院では外来の見学をした後に研修医の方に説明してもらいながら病院の見学をしました。実習を通して感じたことは自宅での治療がとてもいいということと先生に対する患者さんたちの信頼がすごいということです。初日一番最初に先生がスライドを見せてくれたのですが、そのスライドにはネリヤの行動目標などが書かれているだけではなく、実際に患者さんが自宅で治療をしているときの写真やお看取りした後の家族の集合写真も載せられていました。先生が「住まいにいるからみんなスマイルになるんだよ」と言っていた通り家族も患者さんもみんな笑顔でした。また心構えをすることで心残りを減らすことができるという言葉も心に残っています。家での治療は家族への負担が大きくなるけれど患者さんが住み慣れた家で思うように過ごすことができるので幸せだと思うし笑顔でいられるのかなと思いました。大島病院の先生との連携や医療スタッフの間で患者さんの状態を共有するシステムなどもありました。帰り際に先生と握手をして患者さんが本当にありがとうねと言っているのを見たときは先生は本当に頼りにされているんだなと思いました。大島病院では研修医の先生がいろいろなことを教えてくれました。特に救命のところでは機械の説明だけでなく機械を作る人の説明もあって医療には本当にたくさんの方が関わっているということを実感しました。他にも治療の方法や患者さんの状態についても軽くですが説明してもらいました。大島病院でいろいろな経験をしているようで、だからこそ自信をもって説明や治療ができるのだと思いました。何も知らない状態だったけど先生と患者さんとの信頼が大切なことや医療にたくさんの方が関わっているということ、また在宅での治療のメリットについて学ぶことができてよかったです。離島医療未来の日本の最前線という俳句を作りました。離島では少子高齢化が進んでおり家での治療は最先端の治療ではないかもしれないけれど医師や看護師、スタッフが連携をとりながら患者さんが望む一番いいやり方で治療をしているんだと思いました。家族も大変だろうけど周りのサポートもあるし患者さん自身も住み慣れた家で思うように過ごせるからどちらも幸せなのかなと思います。自宅で亡くなることを望む人も多いし高齢化が進んでいるのでこれからは入院できない人が出ることもあると思います。その時に今離島で行われている医療が必要になってくると思います。だから私はこの俳句を詠みました。

地域推薦枠医学生 夏季離島実習レポート 前半 事後レポート

8月21日から25日の5日間、奄美大島で夏季離島実習を行った。

21日は奄美大島へ船で出発し、11時間船上で過ごした。飛行機で行けば1時間だが、これだけの時間をかけて行くことで奄美大島が鹿児島市とどれだけ離れているのかを実感することができた。

22日は大和村国民健康保険大和診療所へ実習に行った。大島病院から車で行くのにも時間がかかる場所で、高齢化率が38%であり奄美群島で最も高齢化が進んだ地域であった。午前中は外来見学をさせていただき、先生が方言を織り交ぜながら患者さんと親しげに会話をし、診察しているのを間近で見て、地域医療において医師は患者さんとどう接するべきなのか、患者さんは医師に何をしたいのかを感じることができた。

23日は大島病院で脳外科の先生に同行させていただいた。腰椎穿刺を見学し、ハリコーンがかかった患者さんへの処置も見させていただき緊張する医療現場を体感し、学んだ。

24日は再び大和村国民健康保険大和診療所での実習で、午後は特別養護老人ホームへの回診に同行させていただいた。スタッフの方々が入居者の方々の体調を管理し、気になる点などを先生に報告するというシステムで、小川先生は診療所への入院患者、訪問診察を担当する患者さんに加えてホームの方々50人ほどを受け持ち、一人で多くの入院患者を抱えているのと同じであるとわかり、僻地の医師に求められる仕事や責任感を学んだ。

25日は保健所で生きたハブを見て、大島特有の自然の危険性を知ることができた。

今回の実習で、座学では学ぶことのできない患者さんとのコミュニケーションの取り方や医療現場での職種によるそれぞれの役割、責任感を実際に体験することで知ることができた。こうして学んだことを忘れずにこれからの学習に活かしていきたい。

俳句 伸びる手を 掴み離さず 村守る

訪問診察に同行させていただいた時に患者さんが先生について、「その手をずっと離したくないような存在です。」と話されていたのがとても印象に残った。先生は訪問診察の患者さんからの連絡を24時間受け取るようにしていらっしやって、絶えず大和村を守っているのだと感じ、この俳句を詠ませていただいた。

地域推薦卒医学生 夏季離島実習レポート

今回の離島実習では、私は住用診療所コースを回った。8月22日に県立大島病院、23日、24日に住用診療所を訪問させていただいた。

県立大島病院では自分は主に神経内科を見学させていただいた。鹿児島の奄美群島全体の患者は基本この病院で完結させるらしく、本土の病院に紹介することはあまりないとのことだった。神経内科では、何らかの原因で体の神経や血管に異常が生じ、手足が満足に動かせなくなった患者を診察し、薬を処方する、といったことをなされていた。実際に見学した時に見た患者には寝たきりの方も多かった。神経内科で診る病気は原因が分かっていないものが多く、治療する際は対症療法で行うことがほとんどだった。この科で難しそうだと感じたことは、患者に薬を処方する際にただ患者にとって最も有効な薬を提供するのではなく、患者の家庭の状況などを考慮し、その患者に合った薬を決めるといった事だった。また、神経内科が扱う病気は原因がよく分かっていないことが多いことから、薬で一時的に症状が良くなっても年月を経るとだんだんと悪化し最終的に合併症で亡くなる患者が多いという事実は、自分にとっては複雑なものだった。脳に異常が生じ、ことばを理解することが出来ない患者に対しても、神経内科の先生方は一人ひとり丁寧に診察なされていた。

住用診療所では同じ班の人たちと共に、診療所所長の野崎先生の診察や治療の様子を見学させていただいたり、実際に採血や血圧測定などをさせていただいたりした。野崎先生は非常に患者思いの方で、少しでも患者と向き合う時間を増やすために、音声を認識してカルテを書く機能を付けるなど、様々な工夫をなされていた。先生自身は、地域という物質的に限られた環境の中で工夫することを楽しんでらっしゃるようだった。診療所内はすごくきれいに整備されており、来院する患者も幅広い世代がいらした。往診の様子も見学させていただいた。3件の個人宅と特別養護老人ホームを訪問なされた。訪問する際に患者の、食事の摂取状況や運動状況など様々なところに気を配られていた。老人ホームを訪問する際には、患者の診察だけでなく、他のお年寄りや事務の方にも明るい挨拶をし、施設全体の状況を把握もなされていた。野崎先生が思う地域医療を行う上で大変なことは、医師が少ないため複数の重症患者が一度に来て一人でも冷静に対処しなければならないこと、患者の生活習慣を改めていただくよう説得すること、輸血するための血の量が少ないため何か大事故が起きたときに輸血量が足りなくなること、であった。地域医療を行う上で重要なことは治療後の経過もしっかり診ること、むやみに大病院(大島病院)へ紹介状を書かないことだとおっしゃった。

今回の離島実習で新たに考えるべきことが見つかった。治らない病気とどう付き合うかと、地域の人々はどのレベルの医療を求めているのかの2つだ。今回の離島実習での経験をもとに、すぐに答えは出せないであろうが、この2つについて今後じっくり考えていきたい。

俳句：スマイルで 和らぐ不安 増す元気

背景：住用診療所で見学させていただいたとき、個人的に他に重要だと思ったことは、笑顔をもって患者に接し、患者の不安な気持ちをやわらげることだ。実際に先生は、私が採血に失敗し患者の腕から出血しても全く焦った様子を見せることなく笑顔のまま処置をなされた。笑顔を決やさないことがその地域の健康水準の底上げにつながっているのではないかと思い、この俳句を作った。